

A-Lab

archive

vol.8

A-Lab **Exhibition** Vol.7

まちの中の時間

うまれくるもの

小出麻代

A-Lab
あまらぶ アートラボ

尼崎市

お問合せ先

尼崎市 シティプロモーション推進部 シティプロモーション事業担当

TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)

FAX : 06-6489-6793

E-mail : amalove.a.lab@gmail.com



A-Lab archive

■

あまらぶアートラボ A-Lab Exhibition Vol.7

「うまれくるもの」

■目次

「うまれくるもの」	03
アーティスト トーク 「野口 拓海 × 小出 麻代」	17
アーティスト トーク 「大槻 晃実 × 小出 麻代」	23
会場配布資料	38

room1 うごきつづける



小出 麻代 Mayo Koide

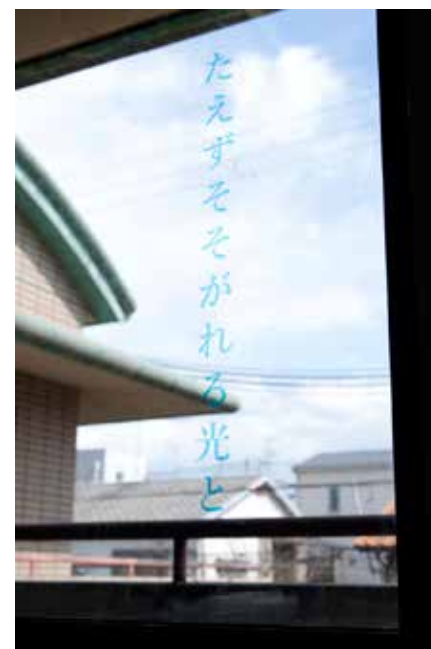
1983年大阪府生まれ。2009年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程芸術専攻版画分野修了。主な展覧会に「1floor2012」(神戸アートヴィレッジセンター/兵庫/2012)、個展「すいこみ はきだし ひろがる」(LABORATORY/ 京都/2013)、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ 2015 枯木又プロジェクト」(旧枯木又分校/新潟/2015)、「まちの中の時間」(あまらぶアートラボ A-Lab/兵庫/2015)、「PAT in kyoto 京都国際版画トリエンナーレ」(京都市美術館/京都/2016)、「連鎖とまたたき」(京都精華大学ギャラリーフロール/京都/2016)、「empty park」(Gallery PARC/京都/2017)など。現在大阪府在住。



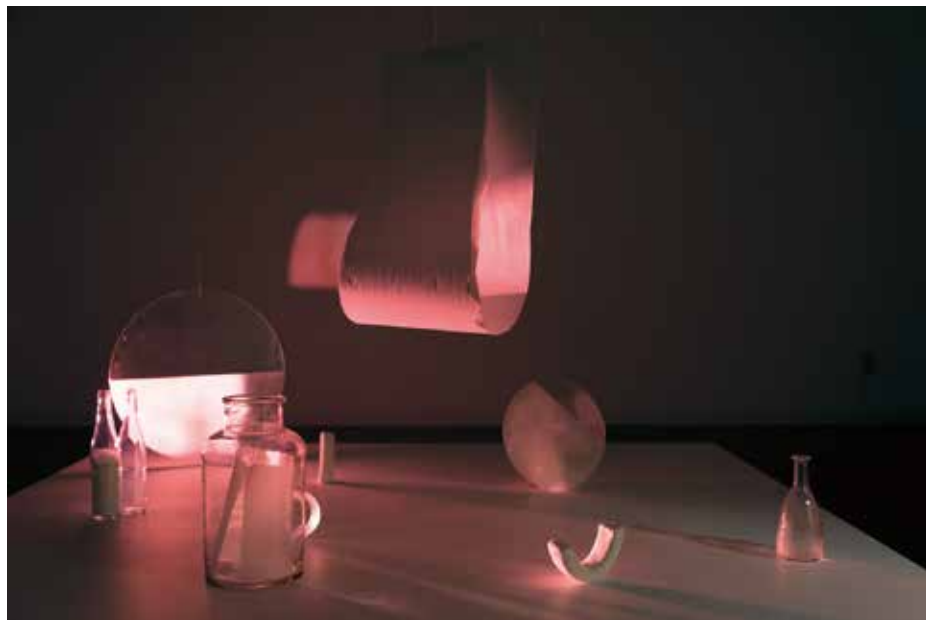




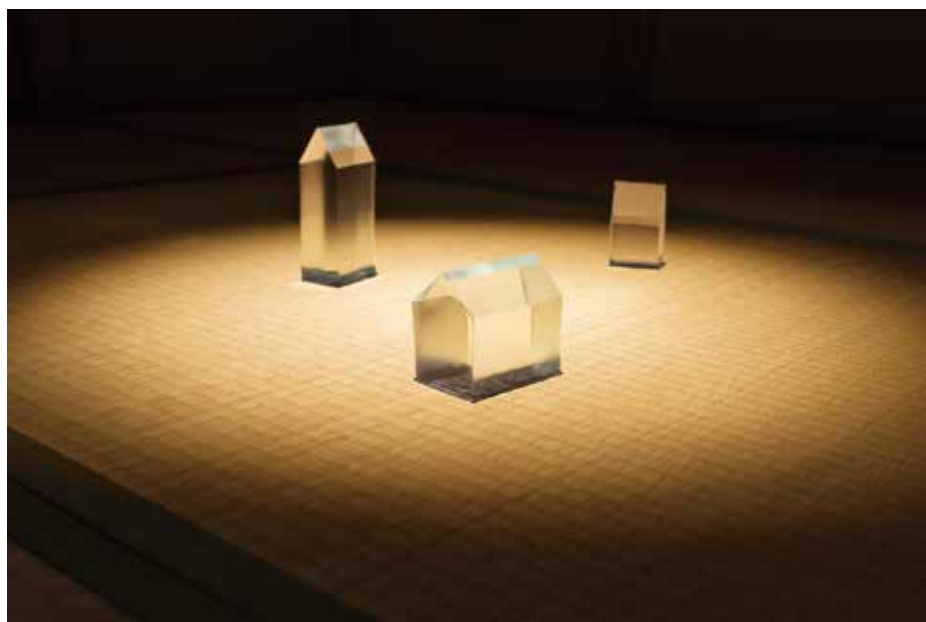
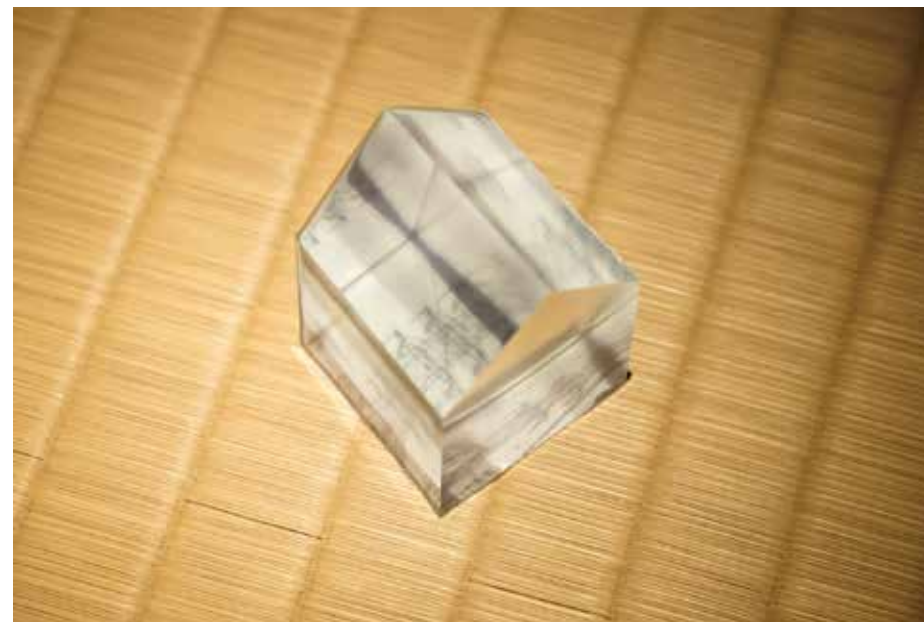
廊下 うまれくるもの



room3 こえをみつめる



和室 夜明けまで



A-Lab Artist Talk

「うまれくる言葉」を交わして

出演 野口 卓海 (美術批評家・詩人)、小出 麻代 (出品作家)
司会 都市魅力創造発信課長 松長
日時 平成29年3月11日(土) / 午後3時~午後4時
場所 あまらぶアートラボ(A-Lab ロビー)
来場者 16人



そこで起こる化学変化を

小出麻代さん (以下 小出) まず、今回の対談に野口さんに来て頂こうと思ったいくつかのきっかけからお話します。あまらぶで展覧会をすることが決まって最初にリサーチに行ったのが、尼崎市立地域研究史料館でした。館長さんに尼崎の話を色々聞かせて頂いた中で、地名の話になりました。地名って、そこがかつてこういう姿をしていたみたいなのが変わらず残っているものだ

思っていたのですが、長い時間の中で当て字や、縁起のいい字に変えられていたりすると。謂れにも諸説ある。だから真実は分からない部分もあるけど、それを信じ伝えようと思った、それぞれの時代に生きた人々の生活や置かれた状況を考える事が面白いという話をしてくださいました。初めは、歴史を知ることが制作のきっかけになるんじゃないかなと思ったけど、その話を聞いて、かつてここに住んでいた人達の感情や心の機微を知りたいと思うようになりました。史料館でお借

した本を読んでいたら、そこに古い和歌が載っていて、それは今ではもう見ることの出来ない景色を詠んだものでした。もちろん写真のある時代じゃないから本当の姿はわからないけど、その風景を見た時の作者の感動が伝わってくるものでした。それに興味を持って、自分も言葉の作品を作ってみたいなと思ったし、言葉の表現をしている人と話をしてみたいなと思って。その時に野口さんのことが浮かびました。以前から野口さんの活動は拝見していたのですが、ある展覧会のアーティストトークを観に来てくれた時に、するどい質問を投げかけてくれて、面白い人だなと思って。聞くと、同い年、誕生日も近い、血液型も一緒、占いの結果もほとんど一緒 (笑)、という人だった。

野口 卓海さん (以下 野口) 小出さんとはずっと面識はあったけど、こういう風に話すのは初めてですね。僕もまさに展覧会を観たりとか作品を拝見したりしながら、小出さんも関西で活動されているのでいつかこういう機会があればいいなと思っていたので嬉しかったです。言葉と美術の関係ってなかなか難しいところがあると思うんですけど、今日はあまり専門的な話は抜きにして、言葉と美術がどういう風な思案性を持っているのかとか、お互いが言葉を扱う時どこに注意を払うかみたいな話をすれば今回の展覧会自体もまた違って見えてくるのではないかと思います。作品の中に言葉が扱われているので、それは結構驚いたというか…。初めてですよ。

小出 作品として出すのは初めてです。

野口 それはなぜ扱おうと？

小出 普段、作品の中で言葉を扱うのは、タイトルと作品に関する短い文章です。解説をしすぎて、言葉が作品よりも先行することは避けたいので、作品の後ろに行くような言葉を使うようにしています。それを一度単独で作品にしてみたかった。あと、この会場には長い廊下があるのですが、そこ

を歩いている間に作品から意識が途切れてしまうのが気になっていました。そこに何か次の作品へと繋ぐ為の仕掛けがあるといいなと思って、8つの文章を壁に貼ることにしました。1つの文章として読んだ時と、2つ、3つ連続で、あるいは順番を変えて読んだ時とでは印象が少し変わるように意識して作っています。文章を読み各展示室の作品を見ていく事が、それぞれで存在している作品をさらに大きな1つの作品としての表情を見せてくれるのではないかと考えました。文章は尼崎のいろんな所に行った時に、見たもの様子、思ったことを書き留めた言葉を組み合わせました。

野口 今その話を伺っていて、パツと浮かんだのは宮沢賢治が自分の詩のことを「心象スケッチ」という言葉で表していることです。今まで小出さんの作品って全部繋がってるような区切りがないような状況をずっと作ってたと思うんですけど、そのときなにか繋がってるような印象で糸を張り巡らしたりされてたじゃないですか。それも「text」と「textile」は語源がもともと一緒で「texere」ってラテン語があるんですけど、それをちょっと思い出したというか、ああいう風にして言葉を使うっていうのはすごく自然な無理のない感じですがすごく好印象でした。現代美術で言葉を使うときにやっぱりどうしても気になる部分とかがでてきたりするんですよ。作家が言葉を扱うときの振る舞いはどうあるべきかみたいな。かなりシビアに求められるので、小出さんみたいな言葉の使い方も作品として成立するんだなと思いました。今回難しかったですでしょ？

小出 難しかったですね。言葉を使った作品をつくるというのは、どの作品よりも先に決めたいんですが、形になったのは最後の方です。この作品だけでなく、全部に言えることだけど、現地制作の時の地域との関わり方っていろいろあるなと思って。表面をなでるくらいで関わっていくのか、手

を突っ込んでえぐり出すのか。通えば、通うだけその場所の事を知ることはできるんだけど、それがいいとも言えない。印象が変わっていくから。尼崎は、いつでも来ようと思えば来れちゃう距離だから、微妙な距離感の中で、自分がどういう態度でいるべきかすごく悩んでしまって、ずっと粘土をこねこねしながら思案しているような状態です。

野口 その場所に対してどういうアプローチをするかみたいなことは、ずっと小出さんがやってきはったからその方法論が今回に活かされてるな。話す言葉もそうですけど、小出さんの作品って石を置きたい行為やと思って。先ほど地名の話がされたじゃないですか。それもまさに石を置いてその場所が全く違った様子を呈するみたいな。その石があることで見え方が変わるみたいな。小出さんの作品も一番奥の和室が特にそういう構造になっていると思うんですけど、持ってきたものをそっと置いてあの空間が持っている意味とか場所性みたいなのが変わるけど、でもやっぱり石を置くだけやから外からの音の影響もあるし。音と作品が混じってまた全然違う見え方をしたりとか、その場所にどう風の影響を与えるかみたいなことをまず重ねてるのかなと。

小出 さっき、野口さんの話を聞いて、自分の制作方法と似てるなと思いました。「みんなが言葉のプロだから言葉はどこにでも落ちてるし、僕はそれを拾ってただけなんです。」っていうスタンス。展覧会をキュレーションすることにあたって、野口さんはいろんな作家、作品の持っている要素をそっと拾ってきて現場での化学反応というかそういう可能性を含んだ「余白」をすごく大事にしているのかなと思ってます。私も、自分が見たことのある現象とか、景色、記憶とか既にあるものを集めてきて、それらが反響し合うことで場が成立するっていう作り方をしているから、似ているところが

あるんじゃないかと思っています。

言葉の使い方を変える

野口 キュレーションをする時にキーワードみたいなものを先に強い言葉で作って、それに合致する作家を集めてくるっていう方法が一般的なテクニックだと思うんですけど、僕はそれが果たして現代美術にとって効果的な時代がまだ続いているのかということに対して、暴力的な行動になってしまうと思うんですよね。キュレーターの保身的な振る舞いで作家が集められてしまう。自分もその片棒を担ぎ続けているんですけど出来る限りそういうことを意識しながらキュレーションはしたいなと思っていて。まあ拾ってくるっていうのが近いかもしれないです。ずっと地図をつくりたいなと思っていて。少し専門的な話になると現代美術って文脈、歴史を作っていく行為を外部の批評家とかキュレーター、あるいは美術館みたいな組織が担ってきたじゃないですか。それって一方方向性がすごく、烙印を押し続けているという感じなんです、その時代や作家とか地域に対してとか。それがずっと効果的な時代は続かないと思っていて、地図で自分がどこにいるかによって変わるじゃないですか。でも同じものを見ながらその地図の重要度で完全に個人で違うし、その日によって変わるし。美術の状況もずっとそうだと思うんですよね。視点はいっぱいあるし、中心がないというか。哲学の世界では脱中心化とかずっとそういう言葉があるけど、実際それが適応されている場面が少ないのをどうやって回避していかってことはずっと考えてるますね。それはでも詩人とはまったく違う仕事の方法ですけど小出さんみたいにそういう風に言ってもらえると確かにちょっとどこか近いようなことがあったのかなと思いました。

小出 詩を書くときに用いる言葉と、美術批評と

かキュレーションをするときの言葉の使い方、気にすることとかありますか？

野口 作家に対してテキストを書くときは責任を負わないといけないので、専門的な言葉になってしまうんですね。どうしても難しく書いてしまいます。なんとなくいいなって本当は言いたいですけど（笑）。詩は彫刻だと思って、どこまで削げるかっていうか。詩とは何かみたいな話、全然できないので。言葉を尽くすことは簡単やし、それを際限なくしてしまうと詩が濁るといえるか、言葉は詩にとって不純なものやと思っているので。言葉を使うと克明にそのシーンを描写できると思うんですけど、書きたかった印象から遠ざかってしまうみたいなことは感じますね。ただ美術に対して書くときはやっぱり説明的になりますね。それを今後どう乗り越えていくかっていうのは自分の中の課題なんですけど。実は詩人を名乗り始めてまだ3年くらいなんです。詩は14歳くらいからで、それを発表したのが2014年で、それ以降詩人らしさみたいなものをキュレーションの仕事にも出していこうかなと。

小出 詩人と名乗り出すきっかけみたいなのはあったんですか？

野口 詩集を発表したので、僕が所属しているデザイナーとイベントのオーガナイザーとコーヒーの焙煎人がいるチームがあって、その展覧会を京都でしたときに最初は何も発表しないつもりだったんですけど、友人たちが詩集出してくださいよと。発表したとき、購入してくださる方がいてくださったので、「ああ詩人なのか…」と思いました（笑）

小出 じゃあそれまではどこにも発表してなかったんですね。自分の為に書きたいな。詩人と名乗り出してから書いている詩とそれまでに書いてた詩ってやっぱり違う？

野口 難しい質問ですね（笑）。一緒ですね。初め

て出した詩集が「1行のための習作」なんですけど、100ページあって1枚1枚がバラバラなんです。1冊1冊の順番もバラバラで、詩集を作ろうと思ったときに編集作業によって詩の印象がガラッと変わったりとか前後関係が生まれてしまったりとか自分の中ではちょっと違うなと。僕詩って最終的に1行でいいと思っていて、フォントが明朝体じゃなくてもゴシック体でもポップ体でもあるいは大きさがバラバラでも成り立つような一行があるのではないかと、そういう構造にしたんです。だから1枚1枚でも成り立つようなものがあつたりとか。

小出 私が表現という行為の中で、美術以外に影響を受けているものの中に「詩」があって、それこそ詩集もよく読むんですけど、今日は野口さんからの提案で、好きな本をいくつか持ってきたんです。その中で最近いろんな人に薦めているのが、寺田寅彦さんの本です。物理学者でありながら、随筆や俳句もたくさん残している人です。観察眼と言葉の扱い方が面白くて、例えば「線香花火」という随筆では、火をつけてから火球が落ちるまでの数分のことが書いてあるんですけど、壮大な小説のような読後感。たったひとつの小さな現象に対



野口 卓海さん

して、これだけ言葉が出てくるんだってことに驚きを持って読みました。ぜひ読んでください。あと谷川俊太郎さんも大好き。

野口 本当に詩人として生業が成立しているのが谷川俊太郎以外ないのでその点がまさにすごいですよね。詩は生前の現代詩とか読むけどあんまり精読しないようにしてて。中原中也が一番影響を受けたので、中原中也くらの世代の詩は結構暗唱できるくらいに読みました。けど、谷川さんとかそれをやっちゃうと怖いので、できる限り距離をとってますね。現代美術作家、特に若手の作家がステートメントを書くときに訳のわからない言葉を使うじゃないですか。詩に似た言葉のようなもの。あれはやめたほうが良いというか、すごく難しい問題やと思っていて、なんで日本の若手の作家がああいう風になりがちなのかぜんぜんわからないんですけど。李禹煥とかは理論をかける上に、柔らかい言葉をかけるってところが魅力だと思いますね。ときどき美術作家の人いるんですけど、言葉が面白い人。写真家の志賀理江子さんとか。打ち合わせのとき話しましたけど写真やってる人って言葉うまいよねって話を小出さんとしたことがあって。さっき言ってた詩情みたいなものが世界には充満していて、僕はそれを言葉で持ってくるんですけど、それを写真家はフィ



小出 麻代さん

ルムで感銘させて持ってくる。友人の写真家が言っていたのはむっちゃ写真的な風景が広がってさ、みたいなことを言うんですけど撮ってないんですよ、撮らなくていいみたいな。説明してくれるんですけど、もう撮らなくてもいいと思うらしいんですよ。ためうらしいんです。それを克服する作業も彼の作家性にとって多分重要なだろうけど、その話を聞いたときにわかる！ って思ったんですよ。同じ感性だなんて。

小出 私は写真のプロじゃないけれど、すごいものを見たときに、パシャッとできない時があります。これは、頭に残すしかないなって。あの瞬間ってなんでしょね。そして写真家はその瞬間をどうやって克服するんだろうって。

野口 彼が言うには決定的瞬間から遠ざかりたいと言っているんです。例えばすごく高い山に登って撮った写真とかって行けば撮れるし、連の介入するものは自分が撮る写真ではないという話をされていて、それはよく分かるなと思います。

小出 時間も残り少なくなりましたね。

松長 お二人にご質問などございませんでしょうか？

来場者 今日小出さんの作品を初めて拝見したのですが、今回展示をする前に尼崎のことをいろいろ調べたという風に伺って、自分で調べて作品を作った、という段階の中で、そのときに最初にリサーチして思った印象と、展示が完成した後に自分が客観的に見た印象って変わったりしましたか？

なぜそういう質問をするかということ、本当に初めてなので、どこからどこまでが小出さんの普段の状態、どこからどこまでが尼崎が介入した部分なのかという線引きが今ふわふわしていて、それがもし小出さん自身の中でも変化があるのであればお伺いしたいです。

小出 今の状態というと、作品が完成したというところで自分も止まっているので、まだ冷静に考

えるところまでいけないというのが正直なところ。今後、ゆっくり咀嚼していきたくらうと思います。尼崎から受けた印象の話をする、私が住んでいる所から近いのに、一度も来たことがなかったんです。だから、昨年度参加したグループ展のトークでも話したのですが、ステレオタイプなイメージしか持っていませんでした。だけど、実際この街に来て、抽象的な言い方だけど、「動き続けている」という印象を受けました。人が生きているって言う意味もあれば、たくさんの工場でいろんなものが生み出されているとか。私が住んでいる街はまたちょっと雰囲気が違う。私の街は、ベッドタウンっていうのかな、人が休む場所みたいな感じ。もちろんそこにも生活はあるんだけど、動きがゆるやか。この街は跳ねるような動きというイメージ。

どこからどこまでが私の普段の状態かというのは、難しい質問ですね。例えばこれまでで、一番影響を受けた場所は、新潟の山中の何軒かしか家がない集落です。夜は体験したことのない暗闇がある場所で、初めは普通の生活をする事にさえ色々驚きがありました。自然のすごさとか、その中で生きる人の強さとかに触れて、精神的にもだいぶ影響を受けたし、作品にも影響していたと思います。今になって新潟の前と後では、と考えることができるけど、その時は生活も含めて、それが全てだったから。だから、今回もしばらく時間が経って、振り返った時に尼崎以前以後が、出てくるかもしれません。

野口 今回の作品のタイトルが「動き続ける」「うまれくるもの」「こえをみつめる」「よあけまで」なんですけど、何かから何かに動いている状態だったりとか現在進行形言葉がすごく多くて、作品の中に使っている言葉にも呼吸するみたいなイメージを感じました。例えば伸縮するとか人が入ったり、出たりとか。呼吸というワードが作品の各

所で出ているのではないかと思うのですが。

小出 言葉の作品の中の「空気を揺らしながら息をしている」の話をする、息をしているのは自分なんですけど、同時に空気も振動している。一人でここに立ってるわけじゃなくて、いろんなものが絡み合う中で生きている。自分のふるまいが連鎖しているというイメージを言葉にすると「呼吸」というのがしっくりくる。

野口 実際地図を作品の一部に使ったりとか、そういう触れ合い方をすると地名の意味が変わったり、好きな地名が出てくるじゃないですか、ハッとするみたいな。

小出 けま！

野口 けま？ どういう字ですか？

小出 食べるに、満たすで「食満」って読むの。食べることで満たされるから「食満」。で、形が胃腸みたいなの！ほんとに！衝撃的！

A-Lab Artist Talk

「生まれくる場所」をめぐる

出演 大槻 晃実(芦屋市立美術館学芸員)、小出 麻代(出品作家)
司会 シティプロモーション事業担当 松長
日時 平成29年4月8日(土) / 午後3時~午後4時
場所 あまらぶアートラボ
来場者 30人



【対談相手について】

小出麻代さん(以下 小出) 今回、大槻さんをお呼びしたのは、美術館学芸員として、また、あまらぶアートラボのアドバイザーとして、現場に関わっておられる立場から、色々なお話を聞かせて頂きたいと思ったからです。

【展覧会の構成】

小出 この展覧会は、自由な順路で作品を見てもらいたいと思って構成しましたが、ほとんどの方

は手前の room1 から見られていると思います。ですので、違う順路からも見て頂けるように、今回のトークは奥の和室から始めたいと思います。

【和室】夜明けまで

大槻晃実さん(以下 大槻) 「生まれくる場所」という対談テーマをもらった際に何ができるかなと考えた時、小出さんの言葉を引き出していくことが役目だと思い、ギャラリートークの形式を提案しました。作品を前に、いろいろと尋ねていき



たいです。今回の展覧会は2015年のグループ展のテーマであった「まちの中の時間」がキーワードですが、小出さん自身で考えられていたテーマはありますか。

小出 まず、どういう風に作っていくか考えた時に、街を知ることから始めようと思いました。頂いた地図を頼りに、気になった場所に行って、話を聞いたり、調べたりしました。その中で、古くからこの街は交通の要としているんな人が行き交ったり、工場で様々なモノが作られたり、「止まることなく何がずっと動き続けている街」という印象を持ち、それをテーマにできないかと考えました。この展示室は、他の展示室と、対となって存在していて、他室が外に向かって動き続けるものとしたら、ここは、自分の内側のようなイメージです。動き続ける為に必要なものをつくる場所。透明シリコンでできた家の下に写真を置いていて、家を覗き込むと写真に映ったイメージがぼんやり見えます。写真は尼崎で撮ったもの、他の場所で撮ったものどちらもあります。

大槻 今回の展覧会としてのテーマが「まちの中の時間」というテーマですが、小出さん自身で考えられていたテーマはありますか。

小出 テーマが大きい。どういう風に作っていくか考えた時に、尼崎に来たことがなくて、まずこのまちをすることから始めようと、いろんなところに行ったり調べたり聞いたりしました。その中

で動き続けているという印象を受けました。いろんな人が行き交ったり、工場などからものが作られたりなど、ずっと動いているなという印象を持って作成しました。

大槻 なぜ写真を下に置いたのでしょうか。

小出 この部屋の作品タイトルは「夜明けまで」です。家は、眠ったり、日中あった事を思い出したり、考え事をしたりして過ごす場所でもあるから。ぼんやりした写真を見ることで、自分の中に溜まった記憶を覗いているような作品にしたかったからです。

【room3】こえをみつめる

小出 尼崎のことを調べていた時に、板ガラスの発祥地であるという事を知りました。よく素材としてガラスやアクリルを使うこともあって、製造現場をぜひ見たいなと思い、瓶ガラスの製造工場を見学させてもらいました。長いレーンの上に瓶の型が並んでいて、熱を持った真っ赤なガラスの塊が、その型に次々と流されていくんです。瓶は無機物なのに、命あるものを生み出しているように思えました。その光景がずっと印象に残っていて、この作品「こえをみつめる」が生まれました。スライドプロジェクターからは、様々な色で描いたドローイングが映し出されていて、透明や白のオブジェに数秒ごとに当たるようになっています。スライドは一周したら、最初に戻りますが、空調でオブジェは揺れ、変化しているので、常に一定ではありません。大学で版画を専攻していたのですが、刷り上がった作品自体よりも、版を介することで、変化が生まれる事や関係性を考えることに段々と興味に移っていきました。例えば、道端に落ちているゴミに、光が当たって反射して、とんでもなく美しく見るとか、雨上がりの電線にポツポツとついている水滴に葉っぱの緑色が映りこんでいるとか、そういう色んな要素がある瞬間、



重なり合うことで見えてくるものに興味があります。

【廊下】生まれくるもの

小出 今回、言葉の作品を作ろうと思ったきっかけが2つあります。1つ目は、建物の構造上、鑑賞者は、3つの展示室を続けて見るのではなく、途中長い廊下を歩くことになります。何か仕掛けをつくることで、そこを作品同士を繋ぐ場所にしたと考えていました。2つ目は尼崎地域研究史料館へ行った時に、今はもう存在しない場所を詠んだ古い和歌を知りました。その言葉が、イメージを広げてくれて、頭の中に景色が広がっていく。廊下を歩きながら読み進めることで、言葉が作品のイメージを広げてくれるのではないかと思いました。作り方としては、リサーチ時にスケッチする代わりに書き留めていた短い言葉の中から選んだものを、8つの文章にし、壁に貼っています。手前側から読んで、奥側から読んでもらっても成立するようにしています。また、1つの文章を読んだ時と、2つ、3つ続けて読んだ時とは、浮かび上がってくるイメージが変わってくるのではと思っています。

大槻 日本語を話している私たちにとっては共通言語で理解しやすい。だから文字の作品は、自分ながらの情景を生み出して、それが作品になって思いが伝わって来るので、言葉の作品は面白いな

と思います。これが初めての言葉の作品ということで、どう展開していくのかになります。

小出 前回のトークゲストは詩人で美術批評もやっている野口拓海さんに来て頂きました。その時に言葉について話をしましたが、「みんな言葉のプロだから、自分は、その言葉を拾ってくるだけ」と仰ってたのが、なるほど。と思いました。

【room 1】うごきつづける

大槻 メインの会場には作品何点ありますか。

小出 5点です。そのうち3点が、最初に頂いた尼崎の地図を基にした作品です。初めは、地図から読み取れる情報を元に、色々調べたりしていたのですが、そのうちに町の形が気になってきました。サイズの似た直線的な形をした町が並ぶエリアもあれば、大きさもバラバラで複雑な形をした町が入り組んだエリアもある。でも町を歩いて、それ自体の形はわからないし、線が引かれている訳でもない。人はたくさん動いているし、埋立地もあるから、土地も日々形を変えています。面白いなと思いました。それぞれの形がよく分かるように、まず地図を町ごとに切りました。それらを、それぞれ糸で吊るした作品が1点。その切り取ったピースをそれぞれトレースしたものが、部屋に入ってすぐの白い壁に貼ってある作品です。次にトレースした形をさらに、透明フィルムの原稿に書き写して、日光の下で印画紙に焼き付けたサイアノタイプが、ここにぶら下がっているもの。その日の日光で焼き付けるけど、またそれを破いて形をどんどん変化させていくことで、最初にお話した「動き続ける街」というイメージを展開できないかなと思って作りました。ライトの光が当たって、影ができたり、裏側にミラーシートを貼っているの、自分の姿がうつり込んだり、視点を変えることで、見えるものも変わってくるというのが重要になっています。室内も、通常は白い壁が

コの字型、いわゆるホワイトキューブ状になっていますが、壁を前に出して、壁の裏側も使うことで、この街が常に裏も表もなく動き続けているということを形にできないかなと思いました。

大槻 今回、尼崎を象徴するような特定のというものが出ているのではないけれども要素は入っている、リサーチしていくことや、その中で生み出されることについて、小出さんの考えを教えてください。

小出 展示する場所が、どういう性格をしているのか、常に頭のどこかで考えている事の1つです。この空間はどういう地域のどこにあるか、誰がどんな風に使っていたのか、今はどうなっているのかとか、そういうことを考えることは、すごく重要だと思っています。リサーチにも色々な方法論があると思いますが、私の場合は大きな流れ、例えば史実よりも、個人や場所が持つ、断片的な記憶を抽出することが大事で、地域に住んでいる人に話を聞いたり、その人たちの生活を知る、観察する中で、滲み出てくることを作品にしたいと思っています。尼崎の場合も、実際に来るまではステレオタイプな印象しかなかったけれど、関わってみるとやっぱり違うものがある。それを形にすることが私の仕事かなと。

大槻 2015年の越後妻有アートトリエンナーレでは、に展示されたもので、廃校になった小学校の3つの部屋を使って、土地やそこに住む人たちのリサーチを行い、作品にされていた。リサーチの作品はこれが初めてと聞きましたが、公民館という場所をリノベーションしてアートセンターにした場所で作品を展示していると、美術館とはちょっと違う面があるなと感じました。あまらぶアートラボはこの場所にあって、この場所にしかできないものという性格、意味合いが強いのかなと思います。今回リサーチした中で、心に留まった場所や事柄などキーポイントを教えてください。

小出 最初に見た印象が強く残っているので、ガラスは絶対使おうと思いました。この部屋の一番奥で電球が明滅していますが、明るくなった時に見えるのは、鏡越しに映ったカレットという素材です。それはガラス工場見学に行った時に見たもので、今回のチラシの写真にもなっているのですが、不要なピンを砕いて小さくしたものです。それをもう一度溶かして、ガラス瓶の材料にする。ガラスは形を変えながら、ずっと再生している。私が尼崎から受けた印象と、制作の大きなテーマである輪廻とも繋がっていて、ぜひ使いたいなと思って。あとは、人が何気なく言った事がずっと残っていて、それが制作のアイデアになることも多いのですが、尼崎でもいくつか。

大槻 いろんな物事につながっていくんですね。先日、小出さんが制作活動に入るきっかけとなった話を聞いた時に、「終わりをつくらないようにしている」とおっしゃったのが印象的で、それが「生まれくるもの」として、繋がったり繋がらなかったり、フワフワ浮遊していく感じの言葉であるなと思いました。

小出 終わりをつくらないようにしているというのは、例えば何年前かまでの展示では、展示空間内を、細い紐を手がかりとして、視線を巡らせていくと、そこにある小さな作品に出会うという構造で作っていました。紐を追うことで、作品だけでなく途中の空間もじっくり見れるように。その



紐の先を空間内で切らずに、建物の窓から外に伸ばしてずっと先まで繋がっているように見える作り方とか。最近の作品は、モノ自体は薄っぺらいけど、そこに光をあてることで影が拡張して、先に続いていくようなものを作っています。考えていることは紐の時と同じで、詩を読むときの余白のような役割をしているというか。物語とかが、そこでおしまいとなったらパチッと終わる。でも詩を読むとき、余白があるから、そこで終わらないというか、自分の中で新たに更新し続けていける。自分の作品も、私がここでおしまいというような作り方をするんじゃないかと、見た人がその後またどこかで違うものや景色に出会ったときに、私の作品と記憶の中で繋がって、思い出す作業してもらえるのが望ましいというか。

大槻 A-Labは、尼崎という地域と強く繋がっている場所だと感じます。展示室で見た感動を持って館を出ても、まだ尼崎の土地であるということが、空間と位置する場所がすごくいい関係で。この場所があって、この作品があって。皆さんがご覧になった後、尼崎との関係性を新たに生み出されたりするんじゃないかかと思えます。

小出 この展覧会は、この地域の具体的な何かを制作しましたというものではないので、自分の記憶と繋げてもらって、いろんな見方をしてもらえたらと思います。順番もあるようでない作り方をしているので、自由に巡ってもらいながら、座り



小出 麻代さん

込んだり、寝転がってもいいので、何か、自分的ポイントを見つけてもらえることが一番やりがいです。

大槻 最後に小出さんの今後の展開をお話していただいてお茶タイムにしたいと思います。

【ロビー】(今後の制作に関して)

小出 しばらく時間ができるので、生活と制作に同じような割合で取り組む。それを一緒にやっていくと作品が変わってくるんじゃないかか。あとは、ずっと室内で展示しているので、素材的になかなかハードですが、屋外での展示に挑戦したいのと、ボリューム感でなく、スケール感を変えたいのが目標です。

大槻 スケール感を変えとは？

小出 スケール感とは、作品の大きさに限った話ではないです。すごく小さなものでも、それ一つで空間が満たされる作品もある。自分にとってのスケール感をもっと意識するという事です。

大槻 尼崎市民の方で、今日ご覧になられて感じたことは。

来場者 尼崎のイメージが犯罪の町とかお笑いの町とか、ステレオタイプの考え方の人が多いが、すごく素敵な形で翻訳していただいて、尼崎市住民としてとても嬉しく思いました。もともと小出さんの作品って透明感があるものとか、光とかガラスとかを多用していると思います。今回は尼崎が板ガラスの発祥の地ということで、ガラスという素材が作品を作る際に使いやすいのでしょうか。使いにくいけどそこで逆に新しいものが生まれるのかと疑問が沸きました。材質についてお聞きしたいです。

小出 ガラスや鏡、アクリルを使うのは、透過したり、反射したり、鏡だと鑑賞者や他の作品、空間も映り込んだり、それ自体はモノとして薄いけど、組み合わせることで、そこに重層的な広がり

を作ることができるからです。学生の頃は素材として、既製品を多用していました。でも既製品はそれだけで美しい、綺麗だから手を加えなくていいやんと思ってしまい、うまく扱えませんでした。なので、自分が丁寧に向き合えるもので、あまり主張してこないものを選んだら板ガラスとか鏡とかが多くなりました。それがもっとクセのあるものだと私はうまく扱えない。基本的に無機質なものを作品に使うことが多いです。

来場者 鏡の見る角度とか、ただの一点透視ではなく、すごく複雑な重層的な構造というものを感じました。さっき言ってたような終わりが無いということも関係しているのかなと思います。尼崎はLGBTの成人式とかをしていて、そういう風な意味でも広がりのある作品というか、いろんなものを感じました。

小出 最初に尼崎は外国人が多いと聞いて、閉ざされてないところだなと思いました。

松長 古い町だが、もともと内の人というのはいまも少なかったら少ないというくらいいろんな人がいて。高度経済成長のときには、集団就職でたくさん四国九州北陸から若い人がたくさん来て。いろんな多様性がある町なので。

小出 カレットのところの作品は、子供だと背の高さが届かなくて見ることができないから、もっと見やすくした方がいいんじゃないかという意見もありました。子供は本当に見たいと思ったら、何か工夫してどうにか見ようとするんじゃないか。という話をしたら、松長さんが、しばらく現場を見た後に、子供の目線だと、下の隙間から覗いて見ることが出来ます！と発見をしてくれました。あんなに嬉しそうなお松長さんを初めて見ました。大人には、結構辛い姿勢ですけど、後でやってみてください。全然見えるものが違います。

来場者 Room 1や3は生まれたきっかけが尼崎と関連してよくわかったが、和室の作品は？

小出 前回のグループ展(「まちの中の時間」2015)の時、設営中は一日中和室にいました。下が保育所だから、時間によって、子供の声が聞こえたり、隣の中学校からのクラブ活動の音、自転車の音、夜になるとご飯の匂いがしたりとか。時計がなくても、大体の時間がわかる。他の展示室はホワイトキューブ状で非日常的になるが、和室だけは、現実の匂いや音がする場所なので、その環境を含めて、作品にしたいなと思いました。



大槻 晃実さん



フライヤー

会場配布資料

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.8
Exhibition vol.7「うまれくるもの」

発行
編集 尼崎市 シティプロモーション事業担当
制作